



北方民族博物館だより

No.132



H7.130.1 ~ H1.130.4 儀礼用衣服一式 北西海岸先住民／クワクワカワクウ（クワキウトル）
 収集地：カナダ／ブリティッシュ・コロンビア州 1940年代製作

クワクワカワクウの人々にとって冬は儀礼の季節である。本資料は儀礼を行う秘密結社の最高位に位置する、ハマツァという「人喰い」ダンサーが用いる装束である。故フレッド・ウィリアムズ（Fred Williams）チーフが使用していたものと言う。

全体に装飾されている木製の頭蓋骨はハマツァが食べた人間の頭蓋骨を表す。また前掛けの下部には小さな銅板が付けられている。北西海岸北部のトリングットから南部のクワクワカワクウに至る先住民にとって、大型の銅板は最も価値の高い財宝であり、富や力の象徴であった。銅板の特徴的な形態が何を示しているかについてまだ定説はないものの、人体あるいは動物の身体を抽象化した表象になっているという説が有力である。銅板は中央部から下部にかけて「T字」型の隆起が作られおり、銅板を用いる殆どの民族の言語において、この部分を指すのに骨に関する語彙が使われている。大型の銅板は儀礼で破壊されることもあり、クワクワカワクウの人々は「T字部分」だけを残し、それに新たな銅片を取り付けることで銅板を再生させた。おそらくこれは、生命が骨から復活するという、北方民族に広く見られる考え方と関わっている。（学芸グループ 野口 泰弥）

目次 Contents

- 1 表紙 儀礼用衣服一式
- 2 令和5年度企画展「ユーコン・ファーストネーションの伝統的アート様式」
- 3 企画展講演会「ユーコン・ファーストネーションのアート史」
 ／講座「雪上の移動用具―スキーからスノーモービルまで―」
- 4 2023年度新収蔵資料
 ／令和5年度口ビエ展「オホーツクシリーズ⑦ 北の状況から」
- 5 講座「アラスカのゴミ問題」
 ／講座「北米での北方文化研究 35年を振り返る」
- 6 INFORMATION



令和5年度企画展

ユーコン・ファーストネーションの 伝統的アート様式

2024.2.3(土)-4.7(日)

協力：ユクジーズ・ヴァン カンペン氏 (アーティスト)

カナダ・ユーコン準州に暮らす先住民（ファーストネーション）は、厳しい自然環境のなかで独自の文化を発展させてきました。本企画展では、ユーコン・ファーストネーションのアーティスト、ユクジーズ・ヴァン カンペン氏のコレクションと彼自身の作品を中心に、ユーコン・ファーストネーションのアート史やその多様性を紹介しています。

幾何学文様時代

ユーコン・ファーストネーションのアートは、古くからユーコンとその周辺地域で育まれてきました。最古のモチーフは1万1,500年前の遺物に描かれた幾何学文様で、ユーコン先住民が西欧文化と接触する直前に使用していたデザインもこれとよく似ています。

ユーコンの初期のデザインはほとんどが幾何学的で、道具や武器の彫刻、衣服やバッグの刺しゅう、太鼓や矢筒の絵として表現されています。描かれたデザインには、様式化された人や動物の輪郭やシルエット、またはその2つを組み合わせたものが多く含まれていました。

初期のアートは、純粋な装飾だけでなく、身につけている人の地位を示したり、超自然的存在とのつながりを示すことを目的としたりしていました。狩りの成功を願い、矢筒には矢が刺さった動物の姿が描かれました。シャーマンは超自然の世界とのつながりを強め、道具に力を与えるため、太鼓に絵を描いたり、道具に彫刻を施したりしました。

「幾何学文様時代」のコーナーでは、欧米との接触以前のユーコン・ファーストネーションの姿を描いた絵、伝統的な衣類や革製、樹皮製の仮面、顔のペイントを表現した造形、幾何学文様やオオカミ、カラス、サケ、カエルといった動物のデザインが描かれた太鼓などを展示しています。



左からカエル、サケ、オオカミ、カラスの描かれた太鼓
(ユクジーズ・ヴァン カンペン画)

ビーズ時代

1840年代には、欧米の商人、沿岸のトリンギットを通じ、交易用のビーズがユーコンにもたらされました。これがビーズ時代の始まりです。

最初は、それまで刺しゅうの幾何学文様に使われていたヤマアラシの針状の毛がビーズに代わっただけでした。その後、おそらく1860～1880年代に花柄ビーズの伝統が確立されました。ユーコンの初期の花のモチーフとデザインは、カナダ東部に暮らすクリーやメイティの人びとの初期のものと同様です。彼らはハドソン湾会社に雇われ、1840年代後半に社員をアラスカ州のフォート・ユーコンに案内していました。フォート・ユーコンでクリーやメイティの花柄模様に出会い、それが気に入ったユーコン・ファーストネーションの人びとは、幾何学的なデザインの代わりに花柄模様を使い始めました。

この時期、ユーコン・ファーストネーションの服装は伝統的な革製のものから西欧風に変化しました。特別なイベントのために、彼らは花柄模様の入った布製のダンスシャツ、ボタン付きのコートやローブ、ビーズ装飾付きのバッグやモカシン、ブーツなど、新しいファッションを生み出しました。こうした新しいスタイルは、カナダでもユニークなものでした。

このコーナーでは、花柄模様のビーズ刺しゅうが施された1900年代初期の革製バッグやウォールポケット、そして伝統的な狩猟用シャツや犬ぞり用バッグを模してヴァンカンペン氏が描いたデザインなどを展示しています。

現在

ゴールドラッシュ、アラスカ・ハイウェイの建設、カナダ政府の同化政策などにより、ユーコン・ファーストネーションのアートに新たな変化がもたらされました。

伝統的儀礼のために装飾を施した衣服が作られることはほとんどなくなりました。ビーズ製品は観光土産となり、花柄のデザインは簡素化されました。そして第二次世界大戦後には、以前のような手の込んだ花柄のビーズは姿を消し、より簡単な花柄か、動物柄のデザインに変わりました。

1970年代にはカナダ・北西海岸地域のアートがユーコンに紹介され、今日では、それらがユーコン・ファーストネーションのアート様式として受け入れられています。

このコーナーでは、ボタンローブ、仮面、トーテムポール（模型）など北西海岸インディアンアート作品、そして観光土産用に作られた人形などを展示しています。

現在、ユーコン・ファーストネーション自身のアートは、全般的に停滞しています。ただ、ビーズ細工に関しては、アーティストがそれぞれ個性的な花柄デザインを創り出しているということです。こうした動きが、ユーコン・ファーストネーションの新たなアート様式を生み出すことにつながっていくのかも知れません。（学芸グループ 中田 篤）

企画展講演会

ユーコン・ファーストネーションの アート史

2024.2.3(土)

講師 ユクジーズ・ヴァン カンペン氏 (アーティスト)

通訳 福田順子氏

企画展の協力者でもある講師にお越しいただき、講演会を開催しました。以下でその概要を紹介します。

* * *

北米ユーコン地域の先住民アサバスカンは、北米で最も寒い土地に住んできた。この地域には食物となる動植物が少なく、人びとは夏にはフィッシュキャンプで漁労、冬には移動して大型獣を狩猟する半遊動的な生活を営んでいた。

こうした生活様式のため、あらゆる物が軽くて持ち運びやすく、天然素材で簡単に作れるものである必要があった。衣服、太鼓、仮面など、多くのものに幾何学的なデザインが施された。1800年代後半までのこの時代を、私は「幾何学時代」と呼んでいる。企画展で展示されている男女の絵には、幾何学時代の衣服のスタイルが示されている。

1800年代初頭、アサバスカンは、アラスカ沿岸のトリングットを通じ、ロシア人から交易品として色彩豊かなガラスビーズを入手するようになった。一方、1840年代後半にハドソン湾会社の労働者が身につけていたビーズの花柄を、アサバスカンが真似し始めた。こうして「ビーズ時代」が始まった。衣服の素材には布が使われるようになり、花柄のビーズ・デザインが衣服やバッグなどの小物に加えられるようになった。企画展で展示中のバッグには、花柄のビーズ・デザインが施されている。

1896年に金が発見されたことにより、その後のユーコン地域は大きく変化した。キリスト教会が設立した学校は、先住民の言語や生活様式、芸術を大きく衰退させた。そして1980年代、ユーコン先住民たちは、失われた伝統を取り戻すため、北西海岸インディアンのアート様式(NWC)を採用した。私はこれを「現代」と呼んでいる。NWCアートは現在ではユーコンで一般的なものとなっている。

* * *

講演の後半には、展示室で作品を見ながら解説をしていただきました。講師の気さくな語り口に、参加者も興味をそそられている様子でした。(学芸グループ 中田 篤)



講座

雪上の移動用具 —スキーからスノーモービルまで—

2023.12.17(日)

講師 中田篤 (当館主任学芸員)

寒冷な北方地域では、積雪や水によって人の移動が妨げられる場合があります。しかし、積雪は地面の凹凸や障害物を覆い、氷は湿地や湖、川の表面を固めるため、移動を容易にするという側面もあります。本講座では、こうした北方地域の環境に適応した移動手段やその道具を取り上げ、構造や発達の道筋、地域差などを紹介しました。



最初に、人が自力で移動するための用具として、スキーとスノーシュー(かんじき)を取り上げました。どちらも足に付ける道具で、積雪に沈みこまないよう、雪に接する面を広くして体重を分散し、一部は滑走する機能を持っています。スキーは板状の道具で、おもにユーラシア大陸に分布しています。スノーシューは枠に横木や網状の構造を加えた道具で、おもに北アメリカ大陸で発達してきました。

次に、動力を使う道具として、犬ぞりとトナカイぞりを取り上げました。その起源は人が手で引いていたもので、その後にイヌ、トナカイを使うようになったと考えられます。犬ぞり・トナカイぞりには、動力源としての動物、動物に曳綱ひきつなを取り付ける装具、複数の動物の配列、そり本体の構造などさまざまな要素が含まれており、地域や民族、環境によって多様なタイプが使われてきました。

最後に、雪上移動用具の現状を紹介しました。クロスカントリースキーやスノーシュー、犬ぞりなどは、現在はおもにレジャーやスポーツに使われています。トナカイぞりについては、一部では実用品ですが、多くの地域でスノーモービルとの併用または使い分けがみられます。

講座では、スキーやかんじきなど当館の所蔵資料をご覧いただきながら解説しました。かんじきを使った経験をお持ちの方は、懐かしそうにご覧になっていました。

(学芸グループ 中田 篤)

2023年度新収蔵資料

北方民族博物館では、毎年北方諸民族に関する資料を収集しています。収集する資料は、衣類や生活用具などの実物資料、伝統文化や現在の生活を記録した映像資料のほか、一般の方からご寄贈いただく資料もあります。2023年度は実物資料40点、映像資料2点を収集したほか、9件の寄贈を受け入れました。

今年度収集した実物資料の大部分がエスキモーの民族資料でした。このうち、多くがアメリカ・アラスカ州のセントラル・ユピックのもので、木製バイザー、ダンス用衣服のほか、ジャコウウシ毛製のネックウォーマー、ジャコウウシ角製の指輪など、ジャコウウシ製の資料が多く含まれています。また、グリーンランド・エスキモーの資料として、スクレーパーやコップ、針刺しなどがあります。

その他、現在企画展で展示中ですが、アサバスカンのダンス用棒（ガンフック）、カザフのキツネ毛皮製コートなどを収集しました。



木製バイザー エスキモー/セントラル・ユピック

映像資料は、研究や普及を目的に館内で上映したり、館外の講演会・研究会などに当館のスタッフが持参して上映するという形で利用されています。今年度収集した2点は、北西海岸インディアンのリルワット（セイリッシュ）のかごや食器、生活用具など、伝統的な物質文化を紹介するもので、いずれも静止画像によって構成されたカナダ映画制作庁の映像作品です。このうち「かご」（7分、1975年制作）は、リルワット語の語りとともに、マチルダ・ジム氏によるかご作りの過程を、素材集めからかご編み、完成まで追っています。なお、この作品は、夏の特別展「北方民族の編むと織る」でも展示しました。また、「生活のなかの品物」（6分、1975年制作）は、リルワットが使ってきた食器、生活用具などを紹介する作品です。

寄贈資料は、北海道アイヌの木彫り熊やアイヌ男女人形、サミのトナカイ皮製バッグ、クリーのヘラジカ皮製手袋などでした。

これらの資料は、北方民族博物館の財産として永く保存するとともに、今後展示や普及事業など、さまざまな機会を設けて活用していく予定です。（学芸グループ 中田 篤）

令和5年度ロビー展

オホーツクシリーズ⑰ 北の状景から

2024.1.4(木) -1.21(日)

オホーツク地域の文化的活動を紹介・発信する展示イベント「オホーツクシリーズ」の17回目として、この時期恒例となった写真展「北の状景から」を開催しました。今回は昨年度もご出展頂いた関根健太郎さんに加え、山田丈司さん、中村正史さん、serikaさんの4名にそれぞれ7～10点、計37点の作品を出展いただきました。

登山がご趣味の関根さんは「知床連山」というタイトルで10点の連作を出展されました。知床連山の四季折々の壮大な姿を撮影された一連の写真に圧倒されます。



山田丈司『鮭の季節』2023年

山田さんは網走と近郊の風景を多く出展されました。網走の二つ岩での鮭釣りの様子を撮影された「鮭の季節」

は、市民にとってはなじみ深い景色ではありますが、日の光に照らされる釣り人の様子の美しさに改めてはっとさせられる作品です。



中村正史『好奇心』2015年

中村さんは網走で撮影されたキタキツネやエゾモモンガの写真を出展されました。市内では頻繁にみかけるキタキツネで

すが、カメラを興味深そうに見つめる愛くるしい仔ギツネの表情に、心が穏やかになりました。

Serikaさんは網走と近郊の街並み、風景、住民の生活の写真を出展されました。夏の明るい日差しの下、海岸で流木の枝をもって歩く女性を捉えた「君と夏」は、からっとしたオホーツクの夏の気持ちよさを巧みに捉えているように感じました。

来館者の皆様もそれぞれの個性があふれる写真をゆっくりと鑑賞し、オホーツクの美しい状景を楽しまれている様子でした。

（学芸グループ 野口 泰弥）

講座

アラスカのゴミ問題

2023.12.10(日) 10:00-11:30

講師：石井花織氏

(東北大学東北アジア研究センター学術研究員)



石井花織氏

現代社会の生活ではごみが問題となることが多くあります。それは日本に限られたことではなく、世界各地で見られる現象です。ごみが「問題」となることは汚染物質が人間にとっ

て有害かどうかという生理学的な次元だけではなく、ごみ処理の制度といった社会的な次元も含まれます。

アラスカは日本の国土の約4倍という広大な土地に、73万人が暮らしています。先住民の村の多くは小型飛行機や船でしかアクセスできない「遠隔地」に位置しています。このような遠隔地でも小型飛行機等で物資を運びこみ、近代的なモノが消費されています。都市から村へのモノの流れは一方向的であり、村で生じた廃車、廃家電、バッテリーなどの有害な廃棄物はそのまま村に滞留します。つまりモノのグローバル化が進む一方で、遠隔地の廃棄物処理には課題が多くあります。

かつてのアラスカ先住民の生活では動物の残渣^{ぞんさ}など、廃棄物の量や種類は限定されていました。しかし、近代化の中で定住化が進み、非先住民との接触によりライフスタイルも大きく変化し、それに伴い廃棄物も変容してきました。

廃棄物をめぐる公衆衛生を実現しようとするのは、人々の生活に介入することでもあります。同化政策の歴史も背景にあり、先住民側が州政府の介入に不信感や不満を示していたこともあります。しかし、現在では両者の対等な関係に基づく対話が重視されており、州政府は遠隔地の村に対し、支援や情報提供を行っています。このようにアラスカのゴミ問題が発生している場所は遠隔地という地理的特徴に加え、先住民集落であるという社会的特徴も持っています。

各村が適切な廃棄物処理を自力で進めることは現実的ではないに関わらず、歴史的経緯から州政府も強くは介入できません。そこでNGOやボランティアなどによる支援や助成金が重要になってきますが、それらは継続性に懸念があります。村の自律性の尊重は重要ですが、廃棄物処理は環境保全や健康問題に直結しており、公衆衛生の平等を今後、どのように実現していくかが大きな課題となっています。

(学芸グループ 野口 泰弥)

講座

北米での北方文化研究 35年を振り返る

2024.2.18(日) 10:00-11:30

講師：岸上伸啓氏 (国立民族学博物館教授)

2024年3月末に定年退職される岸上氏をお招きし、40年(就職されてからは35年)に渡る研究について講演して頂きました。岸上氏の研究は多岐に渡ります。講座ではカナダ・アクリヴィク村で行われたイヌイットの生業活動や食物分配の研究と、モンリオールで行われた都市イヌイットに関する研究を、写真をもとに振り返りました。

岸上氏がアクリヴィク村で調査を開始したのは1984年です。現地に行くと村の人々があまり狩猟活動を行っていないことに驚きました。その理由は村にいる間は分かりませんでした。後になって、当時、ヨーロッパ諸国が動物の毛皮の輸入を禁止したことが、燃料や銃弾のために現金を必要とする狩猟活動を停滞させていたということが分かりました。このことから、現地の生活を詳細に見るだけではなく、それを取り囲む国際的な社会・経済状況も見えていかないと現地の生活が分からないということを学んだと言います。また、人々の生業活動や食物分配を調べていくと、その基盤に家族・親族関係や、独自の命名法によって同一の名前を持った者同士などの特別な関係があることが分かりました。そこから人々の活動を理解するには、その基盤にある社会関係を理解することが重要だと分かりました。



講座の最後には岸上氏の長年に渡る北方研究への貢献を称え、当館の呉人館長より花束の贈呈が行われました。

岸上氏は1996年に国立民族学博物館に着任し、都市イヌイットの研究を開始しました。調査を進める中で生活困窮に陥り、様々な社会問題に直面しがちな都市イヌイットの現状

が分かってきました。この研究が評価され、2012年にイヌイットの政治経済団体からモンリオールのイヌイットに関する調査を依頼されます。この調査はカナダ政府の役人たちと協力して行ったことで、研究成果が実際の政策提言にまで発展しました。

40年の研究を振り返ると、グローバル化や気候変動などで急激な変化を遂げるイヌイット社会の姿が分かります。さらに現在は、自殺や飲酒などの社会問題が深刻化しています。今後は現地調査によって現状を把握し、社会問題の解決を図るイヌイットのウェルビーイングのための研究に取り組んでいきたいと意気込みを語られました。

(学芸グループ 野口 泰弥)

ロビー展 ノーザンポスター&カレンダー

北方民族博物館がこれまで収集してきたポスターやカレンダー、カード類などのペーパーアイテムを紹介します。

会期：令和6(2024)年4月27日(土)～5月19日(日)

会場：北海道立北方民族博物館ロビー

観覧料：無料



ポストカード

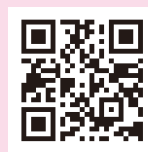
エスキモー 2023年アラスカ／アンカレッジ収集

データベース 「みんなの博物館」

北海道大学総合博物館が中核館となり、博物館7館（北海道大学総合博物館、札幌市円山動物園、札幌市博物館活動センター、むかわ町穂別博物館、群馬県立自然史博物館、北九州市立自然史・歴史博物館、北海道立北方民族博物館）が連携した令和5年度 文化庁Innovate MUSEUM事業データベース「みんなの博物館」が公開されました。北方民族博物館資料は計61点が掲載されています。器、櫛そりと船は3D画像も公開しています。



ここからアクセス！



<https://minna-museum.jp/>

INFORMATION

行事報告

◆12月9日(土)、はくぶつかんクラブ「皮とフェルトで作るカレンダー」(講師：菅原章子解説員)を実施しました。



かっこよく出来たね！

◆12月27日(水)、「ロビーコンサート2023～青少年のための室内楽の夕べ～西洋音楽物語」(出演：札幌交響楽団員)(主催：一般社団法人北方文化振興協会、一般社団法人山田記念青少年育成財団)を開催しました。



ロビーコンサートの様子

◆1月13日(日)、講習会「はじめての歩くスキーツアー」(講師：中田篤主任学芸員、網走スキー協会会員)を開催しました。



歩くスキーを体験する参加者

◆1月20日(土)、はくぶつかんクラブ「フェルトの動物オーナメントで作るサンキャッチャー」(講師：石原生久代解説員)を開催しました。

◆2月10日(土)、第34回北方民族博物館開館記念感謝DAYとして、となかいぞり体験、革のリーフ型キーホルダー作り、かんじき体験、無料開館を実施しました。



トナカイぞり体験

◆2月17日(土)はくぶつかんクラブ「かんじき体験」(講師：野口泰弥学芸員)を実施しました。



なにか見つかったかな？

学芸員実務実習

◆1月30日(火)～2月4日(日)、令和5年度の北海道立北方民族博物館学芸員実務実習として4名の実習生を受け入れました。

北方民族博物館だより No.132

令和6年(2024年)3月19日発行
編集・発行 北海道立北方民族博物館
〒093-0042 北海道網走市字潮見309-1
Tel 0152-45-3888 Fax 0152-45-3889
e-mail: tonakai@hoppohm.org
<http://hoppohm.org>
指定管理者
一般財団法人北方文化振興協会